The Black Create Summoner
黒の創造召喚師

幾威空 Ikui Sora

目次

本編 6

ステータス紹介 267

主な
登場人物
Main Character
ユティス=レイヴィハリア
柔らかい笑顔の裏に
ただならぬ何かを隠した、
リアベルの街のギルド受付嬢。
クロウス=アズラエル
リアベルにあるギルドの
サブマスターを務める、
猫耳の獣人男性。
シルヴィア=レンリル
リリアンヌの弟子にして、
世話係も務める
エルフ族の女性。
リリアンヌ=クリストヴァル
魔の森の端に居を構え、
魔法の研究に没頭している
ハーフエルフの美女。
ソアラ=レミントン
狐耳を生やした獣人の少女。
ギルドへの参加試験で
ツグナと出会う。
ツグナ=サエキ
神様の手違いで死んでしまい、
異世界へと転生した普通の少年。
その際、オリジナルの魔物を呼び出す
「創造召喚魔法」を手に入れる。
ディエヴス
神様の一人で、
ツグナを死なせた張本人。
ツグナに転生するよう促し、
お詫びに特典(ボーナス)を与えて送り出す。

第0話　ＢＡＤ ＥＮＤは手違いから

「――……え……て」

かすかに耳朶を打つ声。それはぼんやりと霞がかった意識に小さく届く。

「ね――……ば、お……てよ」

声が次第にはっきりと聞き取れるようになっていく。それにつれ、意識もクリアになる。

「う……うん……」

ふわふわと心地よい気分を台無しにするかのような声に不機嫌になりつつ、うっすらと瞼を開いていくと――

「よかったぁ～。ちゃんと起きてくれたね！」

そこには、にこにこと微笑みながら見下ろしてくる幼い男の子がいた。フード付きの白いローブを身につけ、見つめる瞳はくりっとした可愛さを宿している。

よほどローブが長いらしく、裾を引き摺っているのは御愛嬌だろう。

「こ、ここは……？」

ゆっくりと上半身を起こす。目の前には見覚えのない、真っ白な空間が広がっていた。

「うん？　ここがどこかって訊かれてもなぁ……」

届いた質問に少しばかり苦笑を浮かべながら、隣に立つ男の子はハッキリと告げた。

「ここは――……冥界への入口だよ」

「……はっ？」

「だから、『冥界への入口』なんだってば！」

頬を膨らませてぷんすかと怒り顔になるが、全くもって怒っているという印象は受けない。

「冥……界？」

意味が分からず、ただオウム返しにそう呟く。男の子はその言葉に気をよくしたのか、続けざまに衝撃的な言葉を告げる。

「そう、ここは死んだ魂が流れ着く場所だよ。さっくり結論から言っちゃえば、キミは死んだんだ――今から約一時間前にね。佐伯継那クン」

満面の笑みで告げられた死亡宣告に、継那と呼ばれた少年は固まるほかなかった。

◆　◇　◆　◇　◆

「俺が……死んだ？」

あまりに唐突な宣告に、継那は思わず訊き返してしまう。できれば嘘であって欲しい、というわ

ずかばかりの期待も……
「モチのロンだね。国士無双レベルで」
「国士無双って」
「役満でも可」
「……麻雀かよ」
「テヘッ★」
これでもかというほど可愛らしい笑みを浮かべながら、腹黒そうな男の子はさらりと受け流す。
「……ちなみに死因は？」
「冗談じゃないぞ」と思う継那だったが、ここで取り乱すのも格好が悪い。
（俺自身、誘拐とかに巻き込まれた記憶はない。病気、という線もあるが可能性は低いだろう……なら、なぜ？）
継那がそう考えるのも無理はない。思い返せば、彼は大多数のうちの一人とも表現できる一般人――それも今年の春に高校に入学したばかりの学生であった。命を脅かされるほどの深刻な病に侵された記憶もない。
そんな人間に降って湧いた死亡宣告である。誰であれ、そうした唐突過ぎる宣告にこのような思いを抱くのは当然と言えば当然だろう。
ふつふつと湧き上がる疑問と怒りを内に秘めつつも、せめて詳しい話を聞いた後で態度を明確にしようと、継那は感情を抑え込んだ。「冥界の入口」という言葉の真偽は分からないが、ここが見慣れた自分の部屋ではないことは明らかなのだ。
「う～んと、普通に事故死だね」
「事故？　だって、俺は家でテレビを見てただけだぞ？」
直前の記憶を掘り返して、告げられた死因に首を傾げるしかない継那だった。確か、いつものように居間でテレビを見ながら、夕食後の時間をだらだらと過ごしていたはずだ。
「まぁ、その後のことを知らないからそう感じるのかもね。あぁ、それとも死ぬ前後の記憶が飛んでるのかな？　ボクとしてはその方が幸せだろうとは思うけどね……ただ、車が家に突っ込んできたというのは事故かな、と」
「……えっ？」
どんだけの確率だよ、と突っ込みたい衝動をどうにか呑み込み、継那は話の続きを待つ。
「キミの死因は事故死。家に車が突っ込んできて、運悪く直撃してしまったんだよ。すぐさま病院に運ばれるも、結局……っていうオチなわけ」
「なんとまぁ……」
呆れるにもほどがある、と継那は自分の不運を嘆いてしまう。そんな冗談みたいな原因と奇跡的な確率によって自分に死が訪れようとは。
「そうそう。このタイミングでキミが死ぬなんて、ボクたちにも予想ができなかったことなんだ」

「ボクたち？　それじゃあ……お前は――」
目を見開いた継那が推測を述べる前に――
「あぁ、言ってなかったっけ？　ボクは神様だよ。キミたち人間が言うところの、ね」
驚いた？　とニコニコと微笑む少年にさらりと言われてしまう。
「あぁ～、うん。驚いた――」
棒読みですげなく答える継那。
「ちょっと！　酷くない？　わざわざボクがここまで出張ってくるなんて、フツーないんだよ？」
膨れた頬と顰め面を継那に向けたあと、神様はころころと表情を変えた。

「でもさぁ、神様って唐突に言われてもな……」
継那からすれば、ハッキリ言って「何本頭のネジが飛んでんだ？」と鼻で笑いたくなるお話だ。
白く広い空間、よくよく見ればうっすらと透けている自分の身体……挙げればキリがないが、ここが「通常とは異なる場所」なのは明白。しかしそれと目の前の人物を信じられるかという話はまた別の問題である。
「ふむ。まぁ仕方ないよね。でも、どうしたら信じてくれる？」
「そりゃあ……神様なんだろ？　神様だったら知ってるようなこと……例えば俺の秘密でも話してくれればいいんじゃないのか？」

どうすれば信じられるか、と問われても継那にも明確な基準はない。だが「自分だけしか知らない」ことを話せるなら、少なくとも信じるに足る人物だと認定できる。
「自分だけしか知らない」とは言ってみれば、その人の弱味なり秘密なりになる。悪意を持っている者であれば、それを利用しない手はない。咄嗟に出した条件としてはまずまずのものだろう。
継那が半ば投げやりにそう返答すると、目の前の少年はこくりと軽く頷いた。
「それもそっか。それじゃあ、経緯も含めて改めて話をしよっか」
ニコニコとどこか黒味を帯びた微笑みを湛えながら、自称神様はすらすらと語り出した。
「キミの名前は佐伯継那クン。性別は男。年齢は十六歳。死因はさっきも言った通り事故死。それも、テレビを見ていた時に家に車が突っ込んできたことによるのが原因……って、確率的に奇跡だよね☆　学校の成績は中の下ってトコかな？　もう少し勉強しておいた方がよかったと思うけど？」
「ほっとけ」
お前は俺の何なんだ、と言い返したい気分に駆られた継那だったが、ここで話を中断させるわけにもいかず、わずかに表情を曇らせるだけに留めた。
「趣味はゲームとラノベ。うっわ、完全にヲタク街道を走り始めてるね。まぁ十八禁には興味あるけど、まだ手を出してないところにウブさが感じられるね★」
アイアンクローを決めようかと瞬時に手を伸ばした継那だが、するりと回避されて虚空を掴む。
「チッ」と小さく舌打ちをすると、神様は「残念でした」と言わんばかりに少しだけ目元を緩ませ

つらつらと話を再開する。
「んで、特技は……絵を描くこと、か。これは凄いね。何度か表彰受けてるじゃん！」
「たまたまだよ、たまたま」
気恥ずかしくなってふいっと顔をそむけるも、褒められて悪い気はしない継那だった。
「ただ、昔はよかっただろうけど……今はねぇ。描いてるのがもっぱらケモミミ美――」
「だあああぁぁ！　ちょっと待ったあああぁぁ！」
「――なんてさ。親御さんが発見したらどーするの？」
「うっ……！」
しまった、と後悔するももう遅い。こんな状態では今さら自分の秘蔵品をどうにかするなんて無理な話だ。完璧なる黒歴史である。封印しようにもできないのが痛い。そしてそれを身内に発見される可能性が大なところがさらに痛い。
「もういいだろ……それ以上俺の傷を抉るな」
思わず土下座したくなる気持ちもそのままに、継那は小さな声でそう呟くしかなかった。心のライフポイントは既に危険域（レッドゾーン）である。
「それじゃあ、ボクが神様って信じてくれた？」
「……」
顔を覆（おお）ってコクコクと頷く継那。

「そうそう、最近までノートに『我が前に来（きた）れ！　顕現（けんげん）せよ！　汝（なんじ）と我（われ）の冥王の契約を～』とか何とか色々書いてる厨二病患者だったって付け加えた方がよかったかな★」
「ぐはっ！」
さらにそんなことを言って笑みを浮かべる男の子によって、継那のライフは完全に削られたのだった。

「……それで？　一体俺に何の用なんだよ？」
悪夢の尋問からしばらく経ち、なんとか精神的に回復を果たした継那は、神様である目の前の男の子に本題を切り出した。
「うん、あのね――」
どこか困ったような表情を浮かべた男の子は、次の瞬間――
「ごめんなさい！」
バッといきなり頭を下げた。
「へっ？」
急転した態度に、思わずそんな高い声しか出ない継那だったが、神様は話を続ける。
「実は、キミは本当ならあの時死ぬことはなかったんだ」
「うん？　でも『車が家に突っ込んできた』っつう事故で死んだんだろ？　そんなこと、予想なん

てできないだろうし、事実そうだったじゃないか」
なんとなくフォローするように、継那は優しく声をかける。
「まぁ、ね……でも、ボクのような神様というのは、大きく分けて二つの役割があるんだ。一つは、一人一人に決められた寿命と運命に合わせて死を与え、来世へと導くこと。冥界が死者の魂で溢れないように、管理しなくちゃいけないからね」
「つまり、人間の死はスケジュール化されてる、とでも言うのか？」
「う〜ん、まぁ厳密には違うんだけど、大雑把に言えばそうだね。だから、そのスケジュールが崩れないよう、予期せぬ事象には神様が介入して軌道修正を図るんだ。元のレールにその人が乗っかれるように。それが神様のもう一つの役割でもある」
「でも、俺は実際に死んだんだろ？　それはつまり――」
「ボクの手違い、ですっ！　あはっ☆」
苦し紛れのその微笑に、思わず拳を叩き込みたくなった継那だった。

佐伯継那、十六歳。
奇跡的な確率と冗談みたいな原因で彼に訪れた死は、神様の手違いによるものだった。

第1話　手違いのお詫び

「それで、結局俺はどうなるんだ？」
神様からの謝罪を受けた継那は、今後自分がどうなるかについて訊くことにした。
理由はどうであれ、自分は死んでしまった。未だに実感が湧かない、というのが正直な感想だし、十六歳という年齢を考えても、まだまだ遊びたい思いはある。けれども、過去を振り返っても仕方がないのは明らかである。であるならばどうするか。
現在と未来を見据えるほかない。
佐伯継那は、こうした局面においても達観し、ポジティブに考えられる人間だった。何事も割り切り過ぎて周囲からは「ノーテンキ」という烙印を押されていたのだが。
「そう言ってくれて助かるよ……それで、キミのことなんだけどね」
ほっと胸を撫で下ろした神様は、そう前置きした上で――
「――なんと！　佐伯継那クン！　キミは見事、転生する権利を得ましたぁ〜！」
バンザーイと両手を上げて嬉しそうな顔をする。
「……転生、ねぇ……」

一方の継那はなんとも微妙な表情だった。
「えぇっ？　嬉しくないの？　だって、転生できるんだよ？　知識とか意識とかはそのままに生まれ変わって、新たな人生を送れるんだよ？　はっきり言ってチートじゃね？」
「いや、そりゃ分かってるよ。そういう小説を何度も読んでるから」
「それじゃ、どーしてさ？」
訝しむ神様に、グサリとひと言。
「――お前の手違いで死んだのなら、当然じゃね？」
「はうっ！」
このひと言が効いたのか、ヨヨヨ……と崩れ落ちながら泣く（真似をする）神様。しかし、見た目と言動に反して存外肝が据わっていた。
「そりゃあコッチの手違いではあるけど、あんまりな物言いじゃない？」
一瞬で復活を果たす。なかなかしぶとい神様である。
「そうか、悪かった……」
すぐさま謝罪の言葉を述べる継那。だが彼もこの神様と同程度に強かな存在なのである。
「――でも、責任問われるのはお前じゃないのか？」
「ぐばっ！」
「さっき、『ボクたちには予想できなかった』って言ってただろ？　ってことはだ、この世界は、お前のような神様が複数で管理していることになる」
「あっははは……ソンナコトイッタカナァ……？」
相手の様子を窺いながらも、継那はすらすらと言葉を紡ぐ。一方、神様の方は分かりやすいほどに目が泳ぎ、乾いた笑いを漏らしている。
気まずい空気が二人の間に流れる中、継那はさらに言葉を続けた。
「いいのか？　ここで時間を食ってたら、他の神様にも感づかれるぞ？　そうでなくても、人の生き死にがスケジューリングされているんだろ？　些細な狂いであっても見落とさない神経質な神様がいたら？　お前の行動が逐一調べ上げられた挙句、手違いで俺が死んだことがもしバレたら？」
推測を重ね、想像を巡らせ、継那は少しずつ神様を追い込んでいく。最初は目が泳いでいただけであったのが、次第に身体が震え出し、冷や汗がドバドバと流れていく様子が見受けられるようになった。
「――……最悪、今の地位は剥奪だな」
「げばぁ！」
よほどその一撃が効いたのか、雷に打たれたかのように一瞬ビクリと身体を震わせて、神様は倒れてしまった。
「そ、それ……で。キミは……何を？」
「特典でもよこせ」

震える声で訊ねる神様に対し、継那はニヤニヤと強かな笑顔と共に、簡潔明瞭な要求を差し出した。

◆◇◆◇◆

神様いわく、転生の条件として「同じ世界への転生は不可」とのことだった。加えて、「転生先は別に人という種族に限らなくてもいい」との言葉もあったが、別の種族として生きるというビジョンは継那には描けなかった。「転生後も人でいいよ」と告げ、代わりに「魔法が存在する世界」を望んだ。

継那も男の子である。ご多分に漏れず、そういったファンタジーな世界に魅了されて育ったので、「魔法」という未知の概念や技術が存在する世界には、少なからず憧れを持っていた。

「オッケー、他に要望はある？」

「う～ん、特にはないかな」

「りょーかいっと……それじゃあ、ここなんかいいんじゃないかな？」

神様が杖（どこから出したんだという継那の突っ込みはスルーされた）を一度振るい、継那の目の前に映し出したのは、ある世界の光景だった。

「……ここは？」

「イグリア大陸っていうところ。ここには『ユスティリア王国』『メフィストバル帝国』『レバンティリア神聖国』っていう三つの国が存在してる」

映し出されたスクリーンのようなものには、大きな楕円形の大陸が広がり、北はレバンティリア神聖国、南東にはユスティリア王国、西南にはメフィストバル帝国と記されている。

「魔法が存在していて、地球のような科学技術は発達していない……当然と言えば当然だけど。種族は人族・獣人族・魔族が主だね。獣人は細かく分かれてるみたいだけど、そこは割愛で！」

「へいへい……それにしても、国が少しばかり小さくないか？」

地図を眺めながら、継那はふとそう漏らした。

「それは森林や山間部、海に魔物や魔獣と呼ばれるものがいて、領土を広げられていないからみたいだね。大陸中央に大きな森が広がっていて、そこは特に強力な魔獣が棲み着いている、と。ここを自国の領土とできれば、大陸の中央を押さえられるメリットはありそうだけど、そのためには多大な労力を払わなければならない。外敵から身を守りつつ、自国の領土を拡大させることは困難だろうしね。そんな犠牲を払うなら、いっそしない方がいい……そんな思惑から、どこも版図を広げられていないようだよ」

表示された世界地図を眺めつつ、神様は世界構成の解説をつらつら加えていく。話を聞きながらも「なるほど」と頷いた継那は「それじゃあこの世界で」と転生先の世界を決めた。

「それで……」

「うん？　何だよ」
もごもごとどこか言いにくそうに俯いた神様の様子を見て、継那はすぐに察しがついた。
「あぁ、特典のことか？」
そう指摘すると、「はうっ！」と奇声を上げて、神様はこくりと頷く。
「どうする？　特典、といっても形式は色々あるんだけど……」
「ってことは、過去に何度か特典付きで転生した奴がいるのか？」
神様の言葉から気付くところのあった継那がそう訊き返すと「まぁ、無きにしも非ず、かな～」と乾いた笑い声を上げ、神様は言葉を濁す。
「ちなみに聞くけどさ」
「うん？　何かな？」
「俺は転生するんだろ？　なら、その転生した先の世界で俺の起こした行為によって死んだ人間とかにも謝罪なり、何らかの便宜を図ったりするのか？　悪影響とか問題とか起きないのか？」
継那はふと疑問に感じたことを訊ねてみた。
これはタイムトラベルものの話によく出てくる問題と似ている。
例えば過去に遡って問題を解決するような場合、遡った人間はその場にいる人間との接触を極力避けなければならない。なぜなら、接触をしたことで未来にどのような影響が及ぶのかが分からないからだ。

現在の継那は、運命というレールから外れた存在である。その自分が転生を果たすことで、何か異常が起きないかと、この冥界――ひいては目の前の神様に対する危惧が生じたのだった。
「心配してくれてるの？」
気にかけてくれるのが嬉しいからか、頬を緩ませて訊き返す神様。一方の継那はさらに言葉を続ける。
「いや、別に。もとはと言えばお前の責任だけど、影響が出ないかと単に気になっただけだからな」
「そんなことが理由なの？」
「寝覚めが悪いのが嫌いなんだよ」
不機嫌そうにそう告げる継那とは対照的に、神様はただ肩をすくめるだけであった。
「もっと気楽に考えればいいのに……」
「初めてのことだから慎重になって当然だろ？」
こんなことを気楽に、なんて考えられる人間なんていないだろうと思いつつ、継那はそれ以上何も言わなかった。
「そーゆーものなのかな？　ボクとしては別にどうでもいいけどね。……んで、話を戻すけど、転生した先でキミによって殺された人がいたとしても、ボクは今回のように謝罪するとか便宜を図ることはないよ」
「なんでだ？」

「だって、キミは死んだからね。『死』という事象によって、運命というレールは終着点に至る。キミが転生を果たした先で殺された人は、別の何かの原因で死亡する。誰がいつ死ぬのかは決まっているんだ。その原因が様々なだけでしかない。ただ、キミの場合は例外だ。転生した先でまた新しいレールが敷かれるわけさ。中身は同じでも、入れる容器や貼られるラベルが違う……みたいなものだね」

「なんだかな……中身は今の俺でも、外見は違うって聞くと自分が自分じゃないみたいな感覚に陥りそうだ」

「う～ん。まぁ気にするだけ無駄だと思うよ？」

「――にしても、お前の説明、どこか上手過ぎやしないか？」

「あっははは……ソウカナァ？」

（あぁ……コイツ絶対、過去にも同じようなことをやらかしやがったな……）

呆れるような視線を感じたのか、神様は乾いた笑みを貼りつけたままだった。

◆◇◆◇◆

「……こほん。さっきも言ったけど、特典には幾つかの形式があるんだよ」

咳払いを一つ置いて気持ちを切り替えた神様が説明を始める。

「形式って？」

「例えばポイント方式。これは『ステータス』がある世界の場合だけど、いくらかの持ち点を与え、その範囲内で自身のステータスやスキル構成に割り振ってもらう形式だよ。ゲームをやっていたのならある程度想像できるでしょ？」

「まぁ、本当に何となく……でしかないけどな。一応説明頼むよ」

継那はゲームの画面を通してキャラメイクをする様子を頭に思い浮かべつつ、説明を求めた。その言葉に頷いた神様は再び口を開いた。

「ステータス、とはその人物の『筋力（STR）・耐久（VIT）・敏捷（AGI）・精神（MID）・器用（DEX）』で、スキルは武技や特技を示している。ポイント形式はステータスに関しては一ポイント当たりいくら、という割合で数値が伸びるし、スキルの取得時にはまとまったポイントが必要、という具合だね」

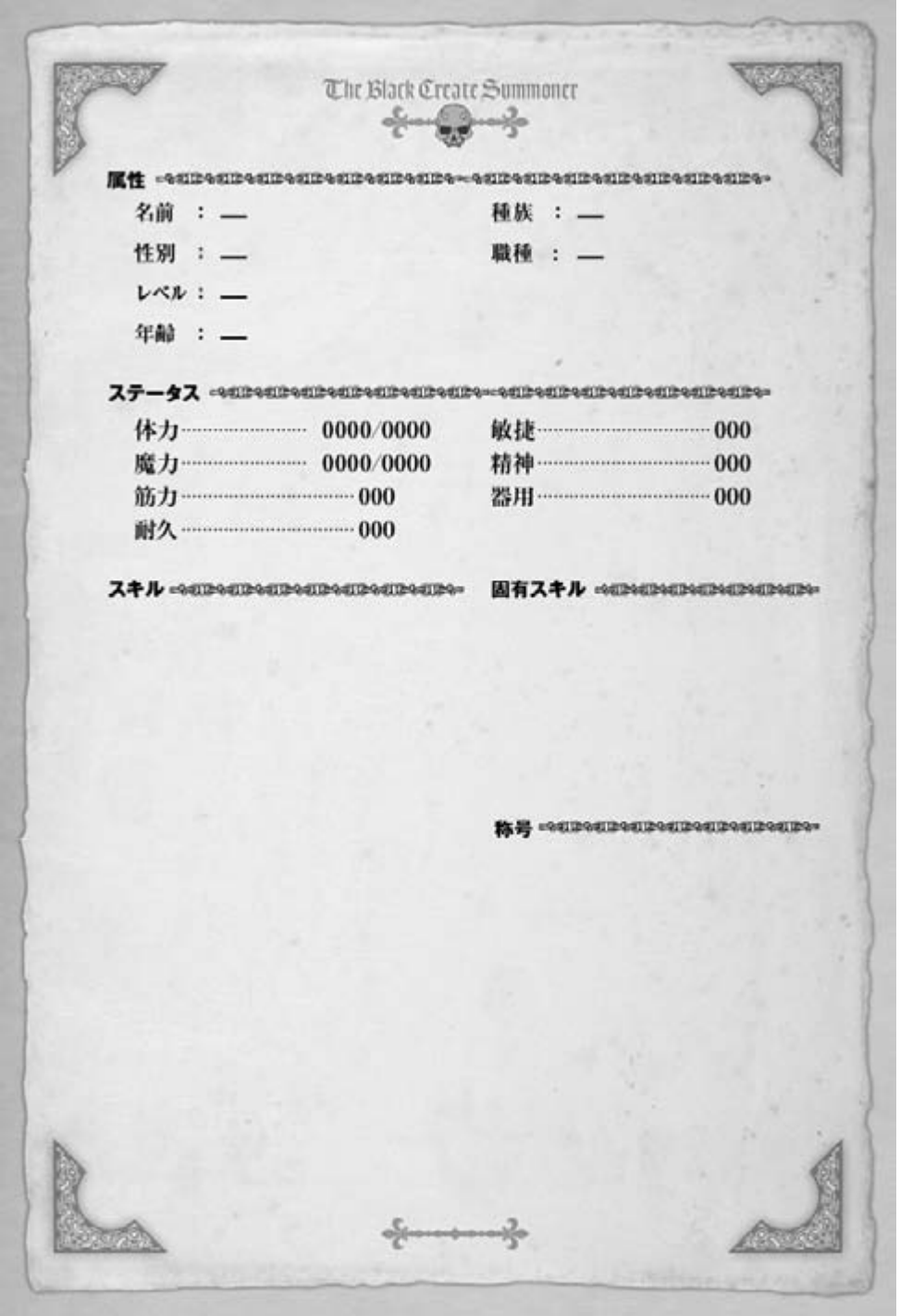
「なるほど。他にもあるか？」

そんな継那の言葉に、神様は「あることはあるよ」と前置きした上で言葉を重ねた。

「他には、ギフト方式っていうのもあるね。これはその転生者個人に何らかの能力を『ギフト』という形で与える方式。パラメーターに細かく割り振れない分、その人唯一の能力になるってのが典型だね」

「確かに、よくあるパターンだな」

神様の説明に、納得と言わんばかりに継那は頷いた。ライトノベルやアニメで似たような場面を



見たことがあったため、名前だけで大体の特徴をつかめる。

「前者は自由度が高いけど、その分チートになり過ぎるんだよなぁ……かといって、後者は受動的に能力が決まりそうだから、自由度高くないし」

「よく分かるね。さっすが伊達にヲタクと厨二街道まっしぐらに生きてない！」

「言わんでよろし！」

はしゃぐ神様に佐伯家の宝刀――ハリセンチョップをかます継那。ちなみに直角ではなく斜め四十五度に叩き込むのがコツだ。「ぐおおぉぉぉ……」と頭を抱えてごろごろ転がる神様を放置し、考えを巡らせる。

「チート能力でウッハウハ～ってのも悪くはないけど、それだと世界を楽しめない可能性も無きにしも非ずなわけで……かといって、ギフト一つに頼るのもなぁ……自分の力で駆け上がりたいしなぁ……」

悩んでいた継那は、「参考までに、転生先の世界って、能力値を表すステータスとか、技能を表すスキルって概念はあるのか？」と問いかけた。

「うん？　ちょっと待ってね……えぇ～っと、あるみたいだよ？」

「ちなみに、項目は？」

「ほいほい。ちょっとお待ちを」

分かりやすく、という配慮なのか、神様は杖を再度振るい、スクリーン上にステータスの項目を表示させる。

「思ったより細かくないな」
「実用性を考えれば、これぐらいでいいんじゃないの？　細分化し過ぎると逆に把握し辛くなるじゃない？　あと、転生すると今のキミのステータスにマイナス補整がかかるからね」
「それもそうか。赤ん坊からのスタートだし、補整も仕方ないな」
神様の言う通り、能力の分類はこれぐらいで丁度いいのだろう。筋力・耐久・敏捷の値でその人の戦力が分かるのだろうし、精神の値が高ければ魔法の威力も大まかに予想がつく。また器用の値が高ければ、生産系の職種に対する一つの判断基準になる。
「ちなみに、ゲーマーでヲタクのキミなら想像はつくかもしれないけど、『職種』や『称号』は筋力や敏捷、体力やMP魔力に若干の補整をかけることができるものだね。職種については転生先の世界で詳しく聞けばいいと思うよ」
「まぁそうなるだろうな。なんとなく予想はつくが、実際どうなのかは分からないし……ちなみに、職種の種類ってどんなものがあるんだ？」
「職種は『戦士』『剣士』『魔術師』といったオーソドックスなもののようだね」
「なるほど、頭に入れておくよ。称号を得られるタイミングや種類はランダムなのか？」
継那は過去にプレイしたゲームの仕様を思い起こしながら訊ねる。
「正解。ただし、効果としては本当に若干の補整がかかるくらいだね。下手に職種や称号に頼るよ

り、素直にレベルを上げるのが定石だろうね」
「まっ、それはゲームでも同じだな」
「これは現実なんだけどね」
ニヤッと笑う男の子に、継那は「お前のせいでこうなったんだろうに」と半ば呆れた視線を向けた。

「それで、特典は決めたの？」
「あぁ」
ぼんやりとスクリーンを見つめていた継那に、いい加減飽きてきたのか神様が問いかける。
継那はニヤリと笑って、横にいる神様に告げた。
「特典は――ポイントを少しと、固有スキルだな」
「……えぇー」
そんな神様の不平はさらさらと聞き流す継那だった。謝罪した手前、これ以上何も言い返せないと悟った神様は「仕方ないな」と軽くため息をついた。
「でも、ポイントと固有スキルを両方くれって……何気に、キミってがめついよね」
「そうか？　別に一〇〇万ポイント寄こせって言ってるわけじゃないぞ。固有スキル以外のスキルに関しては選ばせてくれればいい。もらったポイントを使って収得するよ」

「ポイントはいいけど、スキルの選択には制限がかかるよ？」
「ちなみに、どれほどだ？」
「汎用のスキルについては総数十五個以内かな。固有スキルは要望もあるだろうから、それについては後回しでいい？」
「了解。十分だな。つか、そんなにいらんし」
むぅ、とどこか納得のいかない顔をする神様に、継那は苦笑いを浮かべながらも諭すように言葉を継いだ。
「そんなに贅沢言ってるわけじゃない。最低限のポイントを使って、必要最小限のステータスとスキルを得るだけだ。せっかく二度目の人生を歩めるんだ。成長できる余地を残したいんだよ。固有スキルの方は、そっちからのお詫びの意味がデカイと思うけどな」
「分かったよ。そこまで言われたら何も言えないよぉ～」
少しばかり肩を落としながら、神様は杖を振った。すると、継那の前に操作画面のようなものが現れる。
「それじゃあ、ちゃっちゃと決めてね。ボクも忙しいんだからさ。制限時間は三十分ね！」
「今まで長話に付き合わせてたヤツが何を言ってるんだか」
「うぅ～！　ごちゃごちゃ言わない、の！」
「へいへい」

今にも暴れ出しそうな神様を宥めつつ、継那は自身のステータスをサクサク決めていった。
試しに筋力に一ポイントを振ると、初期値の五〇から五五へと変化する。ＨＰとＭＰは共に一〇〇が初期値らしく、そこからポイントを割り振って決めた。こちらは一ポイントにつき一〇の変化量である。
ステータスの能力値やスキルの構成を決める際、継那は傍にいた神様に頼んでいくつかのサンプルを提示してもらった。能力値については赤子で一桁台、子どもで十数台という値が多い。一般成人男性では四〇前後といったところで、もちろん職種や素質等で若干の誤差はある。
スキルについても、「珍しいな」と目に留まるものがある。回復速度や量がアップする便利なスキルも汎用スキルとなっていた。
また、魔法を使う際に関係する魔力消費量削減のスキルも普通の魔術師でも持つことができるようだ。ただし「何年もの修業の成果として」という前置きが付くが。
「まっ、こんなもんだろ」
「どれどれ……って、うぇっ？　ほんとにこれでいいの？」
横からちらりと覗き込んだ神様は、変化したステータス画面を見て絶句した。なぜなら……

「なんか中途半端じゃない？」
一般論で言えば、まさに神様の指摘した通りだった。
継那の決定したステータスとスキル構成は、ほとんど一般人に毛の生えた程度のレベルでしかない。
「いいんだよ、これで。それで、固有スキルなんだが……」
「はいはい、固有スキルね。どんなのが欲しいの？」
「あぁ、もらう前に訊いておくが、制限はどんなだ？」
「えーと、多くて三つが限度かな。さすがにそれ以上認めるのはちょっと……」
「安心しろって。三つも望まないから」
「ホント？」
「ホントホント」
「それじゃあ訊くけど……何が望み？」
神様は少しばかり怯えるような目で継那を見つめる。どうしてそんなに恐れる必要があるんだよ、と突っ込みたかった継那だったが、それを呑み込み——
「そうだなぁ……あえて言うとすれば——創造召喚、だな。それ以外はイラネ」
シニカルに笑いながらこう答えた。

The Black Create Summoner

属性

名前 ： —　　種族 ： 人族
性別 ： 男　　職種 ： なし
レベル ： 1
年齢 ： —

ステータス

体力	150/150	敏捷	55
魔力	250/250	精神	70
筋力	50	器用	45
耐久	45		

スキル

異世界理解（言語・文字）
回復速度アップ（HP・MP）
回復量アップ（HP・MP）
マップ（広域・詳細）
アイテムボックス（∞）
魔力消費削減
スキル習得速度アップ
刀術

固有スキル

称号

◆◇◆◇◆

「創造召喚って？」
聞いたことがない言葉に、神様は驚きの表情を継那に向けた。
「まぁ、今造ったモンだからな。知らないのは無理もない」
そう言いつつも、継那は解説し始める。
「カテゴリー的には『召喚魔法』の一種かな。召喚魔法は『現存する魔物』を任意で呼び出して使役するものだろ？」
「そうだね」
「けど《創造召喚魔法》は、『俺が造り出した魔物』を呼び出す魔法だ」
「つまり、現存か空想かという点が違うってこと？」
「まぁな」
さすがに神様は理解が早く、たったこれだけの説明でどんなものかが伝わったようだ。けれども、その表情は晴れなかった。
「まぁキミが望むならいいけどさ……その魔法はかなり魔力を食うだろうし、能力自体に制限がかかるかもよ？　何せ、今まで存在しなかった魔法なのだからね。それに、他にオーソドックスな火

魔法とか風魔法とかのスキルがあるけど、本当にそっちはとらなくていいの？」
「あぁ。いらない。使う魔法はソレ一択でいいさ。それに多少制限がかかるのは想定の範囲内だ」
継那は笑みを絶やすことなく、神様の方へ視線を向けたままでいる。
「了解。そこまで言うのなら、もう何も言わないよ……ほいっと」
杖を振るい、神様は継那のステータスを更新した。

「おい、俺が望んだのは一つだけだぞ？」
「サービスだよ。転生した先で色々分からないと不便でしょ？　あの世界がどんな環境か僕には分からないけど、早く強くなれるようにしないと、またすぐ再会することになるかもしれないじゃないか」
「確かにそれは勘弁願いたいね」
両者とも笑いながら、握手を交わす。
手を放すと、小さな神様は持っていた杖を軽く振った。すると、二人から少し離れた場所に一つの大きな扉が出現した。
「あの扉をくぐれば、転生できるよ……ここまで色々話をしてきたけれど、キミは面白いね。神様であるボクに物怖じせずにズバズバと主張するなんてさ」
「損をしたくないだけだって」
「そう言うと思ったよ」
継那は扉の前に立った。後ろでは神様が少しさびしげに、彼の行く先を見つめている。
ドアノブに手を伸ばした継那は、一瞬だけその手を止め、神様の方に顔を向けた。
「そういえば、訊き忘れてたんだけどさ……名前を訊いてもいいか？　神話とか伝承にもあるように、当然名前もあるんだろ？　俺だけ名乗らせるのって失礼じゃないか？」

The Black Create Summoner

属性

名前	： —	種族	： 人族
性別	： 男	職種	： なし
レベル	： 1		
年齢	： —		

ステータス

体力	200/200 Update!	敏捷	55
魔力	300/300 Update!	精神	70
筋力	50	器用	45
耐久	45		

スキル

異世界理解（言語・文字）
回復速度アップ（HP・MP）
回復量アップ（HP・MP）
マップ（広域・詳細）
アイテムボックス（∞）
魔力消費削減
スキル習得速度アップ
刀術
必要経験値 1/20 …… New!

固有スキル

異界の鑑定眼 …… New!
創造召喚魔法 …… New!

称号

そんな継那の言葉に、ポカンと口を開いた神様だったが、やがて微笑を浮かべる。
「まったく。普通は『神様』ってだけですんなり終わるはずなんだけど？」
「いいだろ別に。減るもんじゃなし」
「確かにね。ただ、実はボクには名前がないんだ」
「名前がない？　どうして？」
「だって、大概『神様』って名乗るだけで終わるもの。それに、神話とか伝承って所詮は人の創作だよ」
「そういうもんか？　てっきり有名どころの名前は神話とかに出てくるものと同じかと思ってたな。もし知っているような名前だったら、『人間の想像力はすごい』ってどこぞのネット小説にありがちな言葉を言ってみたかったんだが」
「普通はそうなんだって。キミがイジワルなだけだよ」
神様はクスクスと愉快そうに笑う。
「――……だ」
「えっ？」
「ディエヴス。それがお前の名前だ。この『ディエヴス』っていうのは天空神って意味がある。日によって天候が変わるように、コロコロと表情が変わるお前にはピッタリな名前だと思うぞ」
「もしかして、今付けてくれたの？」

ぶるりと身を震わせ、そう訊ねる男の子。
神様には名前が無い者が多い。そんな現状に「意思疎通を図るのに問題ではないのか？」という疑問を呈する意見もあるだろう。だが、基本的に神様と呼ばれる者たちはそれぞれが集まることがない。自分に与えられた役割をこなし、対象の「世界」の管理さえできていればいいのだ。世界は一つのシステム。それを管理する自分たちもまたシステムの一部である、といった認識が神様の間では通例となっている。
そんなシステムの一部たる神様に名前を与えられるということは、それはつまり「かけがえのない特別」な存在になることと同じだ。
与えられた役割を淡々とこなすことに一種の空虚さを覚えていた小さな男の子にとって、継那が何気なく告げた一言はことさら嬉しかった。
「まぁな。というより、名前がなきゃこっちが不便なんだよ。気軽に呼べないし」
ぶっきらぼうにそう言った継那は、気恥ずかしそうに顔を背け頬を掻く。
「キミがまたこの場所に呼ばれるような事態にはならないで欲しいけどね。でも、ありがとう！　行ってらっしゃい！」
目に一杯の涙を溜め、ディエヴスは手を大きく振って見送る。
「おぅ！　またな！」
継那はディエヴスを振り返ることなく、異世界へと続く扉を開けた。

白く輝く光が彼の全身を包み込み――魂と化していた佐伯継那という存在は、この瞬間をもって消えたのだった。

第2話　異世界でも現実は厳しい

イグリア大陸の中央に広がる大森林。木々が生い茂り、多くの生き物が生息するその森林の北側に一つの国が栄えている。

――レバンティリア神聖国。

その国の特徴は、国の外縁部を厚く高い城壁で囲っていることだろう。これは森林からやってくる魔獣などに対処するためのものである。

そんなレバンティリア神聖国にある、とある屋敷の一室。そこでは若い男が一人と白衣姿の男が一人、頭を抱えるようにして呻(うめ)いていた。

「どうして我が家から……」

その言葉は、絶望にも似た響きを伴って流れていく。

「御舘(おやかた)様……厳しいようではありますが、これは現実です……」

若い男の真向かいに座る白衣姿の男は、どうにもならないといった面持(おもも)ちで淡々と事実を述べていく。

「先ほどお生まれになられた御子息の特徴は――」

もう一度、現実を見せるため。

医師である白衣姿の男は、カルテを持ちながら話を始める。それを聞いている若い男――この辺りの領主であるイリーアス＝ハイエルは手で顔を覆ったままピクリとも動かない。

ついさっき生まれたイリーアスの息子。最愛の妻から生まれた、愛すべき自分の子供。その子供の容姿には、大きな問題があった。

黒髪黒眼。

この国にとって、「黒」とは災いを呼ぶ色を指している。全てを呑み込み、喰らい尽くす禍々(まがまが)しき色、災厄の色……人によって受け取り方に差はあるものの、皆そうした「呪われた色」という認識を持っている。

事実、黒をその身に宿す者は、ここレバンティリア神聖国には一人としていない。

いや、「いなかった」と表現するのが妥当だろう。

レバンティリア神聖国の住人は「金髪碧眼(きんぱつへきがん)」が標準的な外見的特徴となっている。イリーアスの下には、先ほど生まれた子を含めて四人の子供がいるが、うち一人は金髪碧眼の男の子、残る二人は母親譲りの赤髪碧眼の女の子である。ただの一人として黒髪黒眼はいない。

そもそも常識的に考えれば、そうした特徴が現れるはずはないのだ。

「私は……私はアイシャに何て言えばいいんだ……」
そんな領主の言葉が、宙に溶けて消えていった。

◆◇◆◇◆

（ここは……あぁ、無事に転生できたということか）
神と名乗る幼い男の子と別れ、扉を開けた継那は、ぼんやりとしていた視界が徐々に晴れていくにつれて現状が把握できてきた。
（天井が高いな。身体が思うように動かないし……）
「うぁあ～」
（やっぱり上手く喋れない。まぁ当たり前っちゃ当たり前か）
現状分析を進めていた継那の耳に、ふと目についた扉の先から人の声が届いた。聞こえてくる声は二種類。どちらも男の声だったが、一人はやけに興奮していて語気が荒い。対するもう一方の声は冷静なものだった。
（自分の子供が生まれるってのは、こんなにはしゃぎたくなるもんなのかね？）
あれは父親の声か……親になったことのない継那には分からない感覚だが、自分のことについて話しているのだろうとは何となく予想がつく。

「どうして我が家に『あんな呪われた子』が生まれるんだ！」
だが、先ほどから興奮している男がそんな言葉を発したのを、継那は聞き逃さなかった。
（うん？　呪われた子……？　生まれたってのは俺のことだよな……）
なんとなく雲行きが怪しい、と思いながらも継那は何も言わず（というより話せないのだが）、耳を傾け続ける。
「黒髪黒眼は呪いの象徴だぞ！　我が家系をいくら辿ってもそうした人間はいなかったはずだ！　なぜ、なぜ今になって――」
（どうやら俺の容姿に問題があるようだな……こりゃあ失敗したか？）
継那は「マズったなぁ」とディエヴスとのある会話を思い返した。

「ねぇ、キミは外見について何か要望はある？」
「特にないな」

あの白く広い空間で何気なくディエヴスが放った言葉に、継那は即断即決でこう答えていた。
「まぁ、ブサイクよりはフツウに。フツウよりもイケメンにってトコだな」と割と無難な補足を付け加えて。
（しっかしまぁ……まさか、外見で弾かれるとは想定外だ）

別に容姿は細かく指定しなくてもいいだろうと思い（というより、面倒だったのが主な原因だが）、転生前の自分と同じようにするよう決めたのだが、それが自分の行く末に関わってくるとは完全に予想外であった。

「どうする、このままではハイエル家が取り潰されることに……」

（オイオイ、本当かよ？　生まれた子供の容姿でそこまで行くかフツー）

どこか呑気に考えている継那であるが、他人が見れば「もっと危機感を持った方がいい」と指摘するだろう。もっとも、現状として継那に何かできるかといって、何もできないのだが。

土地が異なれば風習や文化、伝統は当然違ってくる。地球の中でもそうした状況はままあり得るが、ましてやここは異世界である。

日本で培った常識など、当て嵌まる方が珍しいと言えるだろう。

「どうすればいいんだ……」

そうしている間にも話は続いている。聞こえてくる声が悲壮なものなのは変わらない。

（どうしたもんかね……つっても、俺にはどうしようもないけど）

ちらりと視線を移し、継那はまだ満足に握ることもできないほど小さな手のひらを見つめた。そのか弱さに、見れば見るほど「自分は生まれ変わったのだ」と気付かされる。

（まぁ、もう少し大きくなったら、自分から出ていくっていう選択肢もあるだろうけど……）

継那は「またあの神様と会うのも面倒だ」と言わんばかりに――

「ぁう……」

そんなため息をついて、目を閉じた。

◆◇◆◇◆

それから幾許かの月日が流れた――

屋敷の大広間では、見るからに貴族らしき五人がテーブルを囲い、夕食を楽しんでいた。

「御父様、よろしいでしょうか」

「何だ」

不意に食事の手を止め、上座の男性に声をかけたのは、まだ年端もいかぬ少年だった。

「先日、先生から『そろそろ実戦を学ぶ頃合いでしょう』とのお言葉を頂きました」

「あら、それは凄いわね。貴方の年頃はまだまだ実戦を経験するには早いでしょうに」

少年の母親である妙齢の女性――アイシャ＝ハイエルが、口に手を当てて上品に笑う。それを視界の隅に捉えた少年は、わずかばかり目を細めて微笑んだ。

「えぇ、私の魔法が基礎を終えたということです」

この世界に流れる法則――魔法。そこにはいくつかの系統が存在する。

魔法を使用するには、身体の内に眠る「魔力」を循環させて増幅・強化し、「詠唱」をトリガー

として効果を外界へと顕現させる。
体内を巡る魔力の色によって系統が決定し、詠唱によって顕現させる魔法が決まる。その際、求める魔法の威力に適った魔力量が必要であり、また魔法の系統は個々人の資質に左右される。
一系統を「シングル」。二系統を「ダブル」。三系統を「トリプル」。
レバンティリア神聖国に住む人たちの多くが「シングル」だ。トリプルともなれば、その存在が国中にすぐさま知らされるほどに稀少である。
「それはお前の『四系統』すべてについて、『実戦を交えながら磨いていくべきだ』……と？」
上座の男性――イリーアス＝ハイエルはちらりと少年を見て呟いた。
「はい」
父親の疑問に、少年――イリーアスの長子、レイン＝ハイエルは短く答えた。
「なるほど。分かった」
「ですが、やはり不安もあります」
前言撤回とも取れるレインの言葉に、イリーアスの手が止まる。
「確かに実戦を交えて自分の魔法技術を磨くことには賛成です。しかし、その前に『練習』しておきたいと思いまして」
「つまり？」
「『アレ』を使って魔法の練習をさせては頂けないでしょうか？」

言外に侮蔑を混ぜたレインの言葉に、イリーアスの手がわずかに震えた。
「『アレ』って～？」
レインの右隣に座る女の子――アリア＝ハイエルが、真向かいの席にいる双子の姉――リーナ＝ハイエルに疑問をぶつける。返ってきた言葉は「分かんない」のひと言だけだった。
「どうせ『アレ』はハイエル家にとって異物に過ぎません」
「ふむ……」
イリーアスは顎鬚を撫でながら思案に暮れた。
レインの言う通り、「アレ」は異物だ。この屋敷にいるだけでも迷惑な存在。今は巧妙に隠してはいるものの、近い将来には存在を「抹消」する予定である。
ならば――
「有効活用しないとな」
「えぇ。そうですとも」
「それがいいかもしれないわね」
涼しい顔で会話を重ねる親子三人に、ただただ首を傾げる双子の娘たちだった。

第3話　地下室と練習台

いくつもの蝋燭が煌々と輝く部屋。壁際には申し訳程度に小さな机が設置され、書籍が広げられている。その前に置かれた、ギシギシと悲鳴を上げる粗末な木製椅子に、幼い男の子が腰掛けていた。

「なるほど……魔力回復ポーションには月光草と精霊水が必要なのか」

手に『初級錬金教本』と記された本を持ちながら、そんなことを呟く男の子。薄暗い部屋の中に溶け込んでいたその相貌が、揺れる蝋燭の炎によって照らし出される。

闇夜に溶けそうなほどに黒く、艶のある髪と眼。パッと見ただけでは性別の判断が付き辛い中性的な顔立ちである。つるりと卵形の輪郭とわずかにつり上がった眼は、どこか猫を想起させる。

――この世界に転生を果たした元地球人、ツグナ。

彼が二度目の人生を歩み始めてから七年が経過していた。

この名前は転生する前のものだ。生まれてすぐ「忌み子」の烙印を押された彼に名を付ける者などいなかった。これは忌むべき黒をその身に宿す子供に、「ハイエル」の名が冠されることを嫌われた結果である。そのため、「自分の名前を自分で付ける」というなんとも奇妙な事態に陥った。

様々な名前が浮かんだが、どうにもしっくり来ず、結局は元のままの「ツグナ」で落ち着いたのだった。

「えぇ～っと、月光草は夜に仄かに青白く光る草だったっけ。んで、精霊水は綺麗な水を錬金の魔法で精製した水……と」

教本に書かれた説明を読みながら、ポーションの作成手順を頭に叩き込んでいくツグナ。こうして一人知識を蓄えていくのが彼の日課であった。

この世界に生まれたあの夜、ツグナは隣の部屋で自分の親が「呪われた子が生まれた」と話すのを聞いている。生みの親の発言から、ツグナはその後に訪れる展開も予想できていた。

そして、それはほどなく現実のものとなった。

「いいか、お前はこれからここで暮らせ」

「どうしてですか？」

三歳になり、物心が付き始めた頃。ハイエル家の主である父イリーアスに案内されて、ツグナは暗く薄暗い部屋へと通された。

「煩い。いちいち疑問を挟むな」

切って捨てるような言葉にツグナはそれ以上何も言えず、黙って首肯するしかなかった。

「時折こちらから呼び出すこともあろうが、その時はおとなしく素直に言うことを聞け」

「分かりました……」

ツグナはこの牢獄でその後の一日一日を重ねていった。

地下にあるその部屋には窓がなく、滅多に人もやってこない。

もともとは書庫として使われていたため、多くの書籍が棚の中に収められていた。それらを貪（むさぼ）るように読んで知識を吸収し続け、現在に至る。この地下室に存在する書籍で未読のものは、現在手にしているものを含めてあと二冊だけとなった。

ちなみに、文字は独学で習得した。ツグナはスキルとして「異世界理解」というスキルを所持している。しかし、このスキルは主に会話や書いてある文字を「読み解く」ためのもので、「文字を書く」ことは対象外となっていた。読めさえすれば生きていけるので、書く方は誰かに代理でも頼め、ということなのかもしれない。しかし、早々に一人で生きていくことを決意したツグナにとっては「読める」だけではダメなのだ。

誰にも頼らず生きていく――そのためにはもちろんこの世界の文字や言語、文法を理解し、書けるようになる必要があった。

幸いにもこの地下室の書棚には辞書や図鑑もあった。時間はかかったものの、今ではすらすらと読み書きできるようにすらなっている。

そうして知識を得ていく過程で、ツグナはこの世界のことを少しずつ理解していった。ツグナの転生前の知識と比べると、細かな名称は異なるものの仕組みとしては大した違いがないことにも気付いた。

まずは時間、特に一年の周期や曜日に関するものである。これはほぼ地球のものと同じだ。一年は十二か月で構成され、月名や日数が異なるものの地球のものと対応させると下記の通りとなる。

一月↓光の月　五月↓空の月　九月↓雷の月
二月↓闇の月　六月↓水の月　十月↓地の月
三月↓暁の月　七月↓時の月　十一月↓宵の月
四月↓風の月　八月↓火の月　十二月↓無の月

ひと月が一律三十日、一年が三百六十日である。地球とは若干の誤差があるものの、すんなり理解しやすいのは嬉しい限りだった。また曜日の概念もあり、こちらはやはり魔法が存在する世界とあってか各曜日を色の名前で呼んでいる。仕組みは地球と同様に七日制である。

月曜↓赤の日
火曜↓橙（だいだい）の日
水曜↓黄の日

木曜→緑の日
金曜→青の日
土曜→藍の日
日曜→紫の日

次に、距離の概念である。さすがは貴族の屋敷、算術（ただしレベル的には算数のような初歩的なもの）の本も取り揃えてあり、距離に対する説明が記されていた。
こちらもほぼ地球に近く、呼び名が変わっているぐらいであった。

ミリメートル→ミメラ（一ミリメートルが一ミメラ）
センチメートル→セルメラ（一センチメートルが一セルメラ）
メートル→メラ（一メートルが一メラ）
キロメートル→キルメラ（一キロメートルが一キルメラ）

（わざわざ新しいことを頭に叩き込むよりかはまだマシだったな……）
呼び名などは未だ慣れない部分があるものの、仕組みとしては地球と同じものであったことに一応の安堵を覚えたツグナだった。

栞を挟み、ぐっと背伸びをした時、ドアがノックされた。
「はい」
「レイン様がお呼びです」
「……分かりました」
ここで「何の用ですか？」と返しはしない。ツグナが呼ばれるのは決まってレインのための「練習台」だからだ。
（……やれやれ。そんなに弟を虐めるのが好きなのかね？　性格最悪だな。まぁ、『あの親にしてこの子あり』ってトコだと思うけど）
コリコリと頭を掻いたツグナは、ベッドの横に立て掛けてあった相棒を掴んだ。その表情に絶望の色は見られない。
転生前から数えれば、精神年齢は既に二十歳を超えている。ツグナは理不尽な要求にいちいち声を荒らげる馬鹿ではない。やるべきことを見据え、来るべきタイミングを待っていた。
ツグナが目的を遂げるまで、あと少しなのだから。
肩に担ぐようにして掴んだ木刀。それは最初に投げ渡された木剣を加工し、元の世界――地球で慣れ親しんだ得物――「木刀」である。
「うん、もうすぐだ……」
ちらりと机の上を見たツグナは、ため息を呑み込んで扉を開けた。

◆◇◆◇◆

ツグナはいつも通り、ギギィ……と重い木製扉を開く。これまで何度となくレインに呼びつけられたその場所は、屋敷内にある訓練場である。

ハイエル家に限らず、ここレバンティリア神聖国の諸貴族の屋敷には少なからず、こうした訓練場がある。家臣団や子息たちが剣技に魔法にと日々鍛練を行い、練度を確保しているのだ。家同士の関係によっては、時折合同訓練なども行われる。

ハイエル家の訓練場はとにかく広い。ツグナの通っていた学校の体育館よりも広いくらいだ。まだツグナ自身の身体が小さいためにそう思うだけかもしれなかったが。

「やっと来たか」

訓練場の中心ではレインが待っていた。端には数名のメイドが立ち、タオルや飲み物を持っている。

「お待たせ致しました……」

「挨拶はいい。さっさと位置につけ」

ツグナは無表情のままに軽く頭を下げて開始線に立つ。両者の間は十メラほど離れている。ツグナの視線の先には、これから行う「練習」を想像したのか、わずかばかりの微笑を浮かべるレインがいる。

（まったく……こっちが魔法を使えないのをいいことに……）

そう心の内で一人ごちるツグナをよそに、レインは「あぁそうだ……」と付け加えるようにルールを宣言する。

「お前は攻撃不可、身体強化魔法の類も不可だ……まぁ、『魔力はあっても使えない無才』のお前にはどのみち関係ないかもしれんがな」

「……」

ここで言い返しても無意味なのは、ツグナにも分かっている。なぜなら、このやりとりは今まで何度となく行われてきた「ルーチン」だから。

「それじゃ、いくぞ……」

レインが手にした得物を構える。それは、刃引きされた鉄の剣だ。ただ、いくら刃引きされたものとはいえ、下手に受ければ骨折程度の怪我は負う。対してツグナの持つ得物は先ほどの木刀。鉄に比べ脆く弱いそれは、明らかに不利である。

けれども、今さら文句を言ってもやはり意味はない。

「はあああぁっ！」

いつもレインの都合で、「練習」は始まってしまうのだから。

――魔法。

それはこの世界に浸透する確かな技術である。

地球での「科学」と同じように、先人たちの知恵を洗練し、体系化したものであり、この魔法もまた「科学」と同様に社会の発展のために使用されている。

魔法には大別して七つの系統がある。火・地・雷・風・水の五系統の基礎魔法に、補助・錬金の二系統の特質を加え、計七系統となる。

これは魔法を使用する際に体内に流れる魔力の色に基づいて分類されている。

「赤」は火系統
「橙」は地系統
「黄」は雷系統
「緑」は風系統
「青」は水系統

これに加え――

「藍」の補助系統

「紫」の錬金系統

である。

例外的にこの七系統以外の系統魔法（例えば光系統、闇系統、時空系統）の存在が確認されてはいるものの、それは扱える者が限定されている。光系統魔法は教会関係者に多く、闇系統魔法は魔族に扱える者が多い。時空系統魔法（転移や飛行等）はある限られた血族のみに与えられる特質的な魔法である。

これらは通常の魔法体系とは少し距離を置く「古代魔法」と呼ばれる魔法であり、広く認知されている「魔法概念」とは別種のものであると考えられている。古代魔法を使う者は、軒並み「ユニーク使い」と呼ばれる。

またツグナも使うことのできる「ステータス」は一見魔法のようだが、これは自身の魔力を使用して自分の状態を表示させるのみだ。外に何かしらの効力を発揮させるものではないため、魔法とは考えられていない。

一般的には基本の七系統魔法が用いられ、その中でも五系統基礎魔法のうちのいずれかに「適性」が認められる者が多い。

レイン＝ハイエルは「四系統（フォース）」と呼ばれる魔法使いである。魔力値が高く、扱える系統は火・雷・風・水の四つにもなる。

幼くしてこれほどの素質を備えた人物は、レバンティリア全土を見渡しても他にはいない。近頃は剣術の方もめきめきと力をつけ、将来を有望視されている人物の一人となっている。

一方、対するツグナはどうか。

……彼の適性は「無し」だった。

それは、レバンティリア神聖国の一角を成す貴族の子息として、あまりに異常なことだった。

「魔力適性が無い……だと？」

かつて、「レインのついで」にツグナの魔法適性を調べた時、その結果を知ったイリーアスの最初の言葉がこれだった。

この世界では子供が一、二歳になると魔法適性を調べる慣習がある。各所に設けられた教会や公共施設等で行われることが一般的だが、身分が高い家柄では関係者をわざわざ家に招いて測定する場合が多い。

測定の方法は簡単で、用意された水晶球に手を当てるだけだ。そうすれば水晶球にあらかじめ刻まれた魔法が対象者の魔力を読み込み、魔法適性を調べることができる。

レインの場合は赤・黄・緑・青が交じり合った四色の発光が見られた。この色がすなわち適性のある系統となる。

レインの後に、目の前に鎮座する水晶球にぺたりと手を当てたツグナであったが、水晶球は何色の発光も見せなかった。発光が無い、それはつまり魔法適性が無いということである。

このように、魔法適性は惨憺（さんたん）たる結果ではあったものの、ツグナの持つ魔力は同世代と比べて高いことは分かっていた。これは水晶とは別の測定が行われ、数値として表される。

「だが、何故……？　魔力値が高いのに適性がないというのは聞いたことがないぞ？」

イリーアスを含め、関係者全員が疑問を通り越して不気味ささえ覚えていた。魔力値が低いために適性が無いというのはまだ考えられる。その場合はいずれか一系統の弱々しい発光が認められる。一般の者であれば珍しくないケースで、約半数がこうした結果なのだ。

だがツグナの場合はこれとは異なる。

家柄も十分。環境も申し分ない。加えてツグナの兄であるレインは四系統（フォース）という素晴らしい資質を備えている。四系統とは言わずとも、せめて二系統（ダブル）ではあろう……というのがイリーアスやアイシャの推測であったのだ。

「この子は……やはり『呪われて』いるのよ！」

イリーアスの横で不意に叫び声が上がる。イリーアスがちらりとそちらを見やると、少しばかり青ざめた顔でツグナを指さすアイシャがいた。

「そうだわ。やはり……その子は呪われているのね……」

侮蔑（ぶべつ）と怯えの混じった表情で、水晶球の前で静かに佇（たたず）む我が子を見る母親。

「で、ですが……魔力値は高いものを示しています。これから発現する場合も……」

「あるわけがないでしょ！　過去にそんな例は確認されていないはずよ！」

この場で唯一の部外者である測定職員にヒステリック気味にそう叫んだアイシャは、傍に控えていた侍女に支えられるようにして部屋を出ていった。残された者たちからツグナへ恐怖と侮蔑の目が向けられる。

そうした困惑と怯え、不気味さを孕んだ部屋の中央に――

（ま、スキルとして魔法を取ってなかったから当たり前か……）

自身に突き刺さる怯えと侮蔑の目をただ無表情のままに受け止め、黙ったまま水晶球を見つめるツグナの姿があった。

◆◇◆◇◆

「ファイヤーアロー！」

おもむろにツグナと距離を取ったレインが、右手を前に突き出して魔法を放つ。現れた炎の矢は三本。真っ直ぐに放たれたそれを、ツグナは床を転がって回避した。火系統魔法「ファイヤーアロー」は、その名が示す通り、炎の矢を放つ魔法だ。威力は弱いが放つまでの動作が短い。初歩の魔法としては優秀なものである。

「ぐはぁ、はぁっ……はぁっ……」

この「練習」が始まってどれほどの時間が流れたのか。レインの剣を回避し続けるツグナの身体は既にボロボロであった。放たれる剣撃の一つ一つが鋭く、受け止めたとしても体格差や武器の差によって追い込まれていく。

状況に鑑みれば――これはイジメ以外の何物でもない。

レインは九歳、ツグナは七歳。二歳離れているとなると、体格差はそれなりだ。加えてレインは日々剣術と魔法の訓練を行っている。教師はいずれも一流と呼ばれる人物だ。剣術は家臣団の団長から毎日マンツーマンで、魔法は宮廷魔導師を週一ペースで招いて学んでいる。レインは今のツグナと同じ七歳から訓練を行っており、二年の月日は二人の実力を隔絶させていた。

「いつもいつもチョロチョロと……」

レインは苦々しげにそう呟き、再び腕を突き出す。

ツグナはほぼ身体能力だけを頼りにこれだけの立ち回りを演じていた。手に持つ木刀は傷だらけながらも折れてはいない。

まるで風に吹かれる柳のようにしなやかな身体捌きと刀術によって、ツグナはこれまでの時間を渡り合ってきた。見る者が見ればツグナのことも有望視するだろう。

ここまで渡り合えたのにはもちろん理由がある。それはスキル「刀術」の恩恵のおかげであった。

転生する前、まだツグナが「佐伯継那」として生きていた頃。彼は父親が警察官という家庭環境から、幼い頃より剣道を習っていた。父親の指導は厳しく、何度アザだらけになったのか彼自身も数えていないほどだ。そんな父親から、「絶対に使うな」と念押しされながらも、剣術の手ほどき

も受けた。剣道はルールが厳格に定められ、広く浸透しているスポーツだ。一方、剣術はただ相手を制した方が勝者となるだけである。人体の構造を学び、どうすれば相手を的確に仕留められるかを究める、徹底して「効率よく人を制す術」が剣術だ。

いつからか、ツグナにとっては剣術を学び己の技を磨くことが日常になっていた。十数年もかけて身につけ、転生前に身体の奥深くまで叩き込まれたそれが彼を救っている。

何度となく剣の道を諦めようとした自分を見守り、指導してくれた父親に、ツグナは心から感謝している。だが、この想いはもう届くことはない。ツグナとしてもそれは分かってはいるが、せめて今日も生き残れるようにと祈るが如く木刀を振るう。

だが、両者の間には決定的な違いがある。

「ウインドカッター！」

「ぐぎっ！」

迫りくる風の刃を、ツグナは木刀で受ける。だが、これまでの戦闘で傷つき、摩耗（まもう）した相棒は既に限界だった。刃の中央部からボキリと嫌な音を立て、木刀は二つに折れた。

近距離では剣術を、遠距離では魔法を。攻防に優れるこの組み合わせは、「魔法適性無し」のツグナには選択できないものである。

遠距離から放たれる強力な攻撃。刀という近接武器しか手のないツグナには、対抗しがたいものだった。

「ウォーターレイン！」

裂帛（れっぱく）の気合が込められた詠唱が訓練場に響く。ツグナは何とか体勢を立て直したものの、致命的に遅すぎた。

腕を上から下へと振り下ろしたレインを視界に捉えたツグナは、ハッと頭上を見上げる。

ポツリと頬にかかる水滴。

「ぐがあああああぁぁぁ！」

そして次の瞬間、雨の如く降りしきる幾筋もの水の針が、ツグナの身体を襲った。服が破け、全身に熱と痛みが走る。そのあまりの数に、ツグナは意識を手放した。

「……ふむ。修練は上々、だな」

レインは放った魔法の感触を確かめるようにそう呟くと、倒れたツグナをそのままに訓練場を後にした。

「う……ぐっ……」

ゆっくりと瞼を開けると、目に映ったのは見慣れた地下室の天井だった。

（あぁ、これもいつも通り……か……）

視界がはっきりしていくにつれ、思い出したかのように全身に痛みが走る。

「ぐっ、くうぅぅ！」

思わず目の端に涙が溜まるが、どうにか上半身を起こして状況を確認する。ふと両手を見れば、痛々しいほどに包帯が巻かれている。最低限の治療は施していったらしい。

「ぐぎっ！　……これは当分おとなしくしておいた方がいいな」

右腕を上げると、釣られるように肩、背中、脇腹がじくじくと痛みを訴える。血が滲んでくることはなかったが、切り傷が全身に及んでいるためか、動く度に所々から悲鳴にも似た訴えがツグナの中を駆け巡る。

「……今日はこのまま寝ておこう」

ここにある未読の本はあと数冊。全て読破し、生きるために必要な知識を蓄えたらこの屋敷から出ていくんだとツグナは目論んでいる。ゆっくりとベッドに向かい、横たわったツグナはすっと目を閉じた。

痛みを振り払い、呼吸を整えると、ツグナの意識は暗闇の中へと落ちていった。その先で、ツグナはまるで何かに導かれるように再び彼と出会った。

「やぁ、お久しぶり」

ツグナをこの世界へと転生させた張本人である神――ディエヴスに。

立ち読みサンプル
はここまで

第4話　再会と最後の一冊

「あれっ？　ここは……」

「やぁ、久しぶりだね。元気してた？」

ツグナは再びあの白い空間――冥界の入口に立っていた。そして、あまり……というより二度と会いたくなかった人物が彼の名を呼んでいる。

「えっ？　嘘っ！　俺ってまた死んだのか!?」

「残念っ！　キミは現在しぶとく生きてます！　やったネ☆」

前回会った時のことを思い出して動揺するツグナに、ディエヴスはテヘペロと可愛く見えるように舌を出してソッコーで否定する。

「死んでない？　じゃあなんで俺はここに……？」

眉根を寄せて訝しむツグナに、ディエヴスはふわりと微笑んだ。

「うん。それはキミに伝えておきたいことがあったからだよ」

「伝えておきたいこと？」

「キミの魔法、についてね」